



明日の天才 報象氣天 今晩も明日も北 東の風涼しく曇 りがちの小雨模 様です

△前六・二〇 夏期獨逸語 講座(第卅三)小田切良太 郎
△前九・一〇 料理献立 「グレンドチキン」朝倉朝 吉發表 日用品値段「調 味品並飲料品」
△前一〇・三〇 家庭講座 「琴の手ほどきと童曲」 (四)宮城道雄
△後〇・〇五 連續講談 「小櫻仙太郎」(第四席)田 邊南龍
△後四・〇〇ヨリ△後五・三 〇マデベルリン東京間 連絡飛行報知機着陸前後 狀況及吉原飛行士の挨拶 (佐々木練兵場より中継) △後六・〇〇 子供の時間 童話劇「星姫と王子」浪華

俠客小櫻仙太郎

田邊南龍

清左衛門は仙吉を娘やのぶの婿にして自分の跡目を繼がせやうとしたが、仙吉は始めて其身の來歴を述べてこれを断つた、此仙吉實は江名淺草の俠客で春中に彫つたほりものが綽名になつて小櫻仙太郎、江戸淺草茅町で手習師匠をする板倉家の浪人菊地仙右衛門の子に生れたが、劍術柔術を好んで武州八王子の俠客峰右衛門の子分となつて男を賣出した處、親分峯右衛門が渡世上の遺恨で同じ仲間不動の三五郎、小金の七之助雲龍岩五郎、惡魔の重五郎

等四人のため殺害されたので其無念を晴らすため四人の行衛を捜ねて仇討をする望みある身であることを打明け鶴沼を出立して信濃路に入り上げ松にかゝつた時道連れになつた男が途中で脇差をぬいて仙太郎を脅迫した仙太郎これを取つて押へて改心を促すと此男は上諏訪の旅籠屋信濃屋辯造の伴辯次郎と云ふ者で放蕩のため實家を勘當され窮餘の出来心と分り辯造を親計へ勘當の詫びに連れ行き滞在し中不圖したことから搜ぬる敵に出會ふ話は次席に

天災

金原亭馬生

熊さん、女房ばかりか母親とも気が合はず、二人共追ひ出すから離縁状を二本書いてくれと家主の所へ頼みに来た、大家もあきれ幸ひ道學先生が知合ひなので夫れに意見を呉れと云ふ添書をして熊を遣つた先生は手紙を見て諭し天道様を引合ひに出して懇々と説き聞かせ、何事も天災だと思つてあきらめなければいけないと云はれた、熊さん悉く感心して歸つて来た程度その時隣の家で大喧嘩が始まつた、それは以前の女房があらばれ込んで来たので熊は早速仲裁に出かけまゝ待つた何事も天災だとあきらめる天災だくと云ふと隣の亭主「イヤ天災ぢやない先妻だ」

童話劇 星姫と王子

浪華少女歌劇團

幕があくと、しばらくの間どこからともなく美しい音楽がきこえるやがて上手天から蜘蛛の精が降りて来て岩の上に半身をあらはして四方を見廻し、そのほとりに人の姿の見えるに安心した思ひ入れで、高きはるか

のほとりを仰ぎ見る、星姫たちがあらはれる。 第二場 息長の宮居 前場より七年の後、日没より夜に移りゆく窓邊に近く大人びた碧姫、物うれはしげに幼児を膝においたまゝ、暮れ行く空を見つめて居る、笹舟のメロデーが遠くから流れて来る強弓を弄んで居た息長の若君七歳が遊びつかれたといふ風情で母君のそばに座る(これだけを記憶して放逐をおき、下さい) テキスト二〇ページ

▽材料及び分量 ヒナ鳥一羽、二百五六十粒位、サラダオイル又はバター二勺、セリ酒又は味淋二勺、鹽胡椒各少量、
▽調味法 ヒナ鳥を背割致しまして小骨を取り去り鹽胡椒を少々ふり掛けて置きます、フライ鍋にバター又はサラダ油を人れトロ火にかけ鳥の皮の方から焼き約十五分位狐色になる迄両面共焼きます、焼け上りましてセリ酒又は味淋二勺を注ぎ蓋をし中火にて蒸して置きます、充分火が通りましたら粗にのせ四ツ割にして皿に盛り焼汁をかけ野菜を附合せて供します

全速服 喫茶部 森本盛一

梅毒 淋病 門專 院醫科 腸胃病 胃性病 腸性病 性病 淋病 皮膚病 婦人病 十二指 腸虫病

優美鮮明 敏速叮嚀 活版印刷の御用命を請願致します 所刷印日每警常 五三町橋長町平 (番〇三六話電)

眼鏡 音器 トキハヤ 平町一丁目

寶鐸院新盆に付ては時節柄提灯其他供物 御遠慮申上候 平田町 森本盛一

謹啓照清院新盆に相當り候へ共故人の遺志に依り提灯供物等一切乍失禮御辭退申上候 敬具 昭和五年舊七月 松本 龜 吉

天瑞院新盆に相當仕候へ共時節柄提灯其他の供物一切御遠慮申上度く何卒惡からず御承知願上候 平町田町 松月堂 金子重次

亡父塚本喜八儀 新盆に相當り候處故人の遺志により提灯其他供物等一切御辭退申上度乍失禮以紙上謹告仕り候也 平町新田町 塚本 保

亡父重雄儀新盆に相當り候へ共緊縮の折柄供養提灯並に供養料其他一切の御贈與を甚だ勝手釜敷候へ共絶對御辭退申上候間不惡御承知被下度願上候 平町鍛冶町 酒井 一 郎 後見者 酒井 秀 治 郎

